

日中友好の旅に思う

野田 尚道

中国東北部を尋ねる旅を重ねることになったのは、日中国交三十周年の2002年7月、地元に住む元満蒙開拓団青少年義勇軍の一員であった長田末作氏の殉教者慰霊法要に同行したことが最初のきっかけである。

その際の慰霊地は、終戦間際のソ連軍参戦により一家六名全員が死亡（戦死、始末死、病死）した親類有縁の地、蜜山県黒台とソ満国境虎林県にある現地人の多くの犠牲のもと五年がかりで関東軍が築城し、民間人を含む約千六百人が戦死したとされ、未だほとんどが未発掘状態の巨大墳墓の如き陸の軍艦「虎頭要塞」、そして、今年2008年7月に「日中友好の原点を歩く旅」でも訪れた方正県にある、逃避行を続けた開拓民が日本への帰国を果たせず、集団自決、零下四十度の冬を越せず収容所で病死、凍死した遺骨5千体が埋葬される「方正地区日本人公墓」であった。

第二次大戦後、五十数年を経た今なお、非業の最期を遂げた叔父一家を思う親族の悲しみと、国策によって「王道楽土」を夢見て渡満した開拓民の無念さに思いを致す時、読経も儘ならず、只只涙が滂沱として流れるのみであった。「手を合わせ祈る心に響きしは忘れてならじと亡き者の声」

今年八十三歳の長田末作団長が訪中の際に行う地元人民政府への表敬訪問では必ず過去の開拓民として入植した自身の謝罪から始める誠意ある挨拶が、戦後生まれの中国の要人達にも感銘を与え、旅の先々で良好関係を築くことが出来、その成果が、三組の国際結婚へと発展した。将来、その子供達が日中友好への絆となってもらいたいということが更なる願いとなっている。

長田氏の熱意と遺族の思いに突き動かされた五回に亘る慰霊訪中の縁が今回の旅参加へと繋がった。

真の日中友好関係を築くためには歴史的事実と向かい合う必要があり、この旅も731部隊罪証陳列館、撫順戦犯管理所旧址陳列館、撫順平頂山惨案紀念館等を巡る日中間の不幸な過去を認識させられる強烈な印象が残ると同時に、一抹の不安を抱くものとなった。

仏教聖典に「怨みは怨みによって鎮まらず、怨みを忘れて初めて鎮まる」という一文がある。方正地区日本人公墓の建立に纏わる秘話や、撫順戦犯管理所での日本人戦犯への中国側の対応は、当時の周恩来という大人君子の存在と中国人民の度量の大きさへの感謝を忘れず、広く日本国民へ伝えていかなければならないことである。

最後に一抹の不安とは、歴史認識の相違や国益追及から来る国家間の摩擦の深まりと相俟って、高まる人民の国策に対する不満の鋒先を躲すための反日教育の材料に、盛んに建設が進む歴史の保存館が利用されていきはしないだろうかという懸念である。

不幸な歴史は繰り返してほしくないことであり、国を変える力を持つ国民（人民）が直接理解し、連携し合える民間交流を今後も精力的に幅広く行っていくことが重要な鍵となるものと考えているのである。

今回も旅で縁を結ばせていただいた皆様方に感謝申し上げます。

合掌

<のだしょうどう、新潟県村上市 東岸寺住職>